

わが懺悔文

小林守城

久方に逢いし女の目の病

わが片思い知るに至るや

君知らずストーカーの如きわが思い

古希を過ぎれば影も懐かし

古希過ぎて独りよがりの罪と罰

忘れがたしの汚れ初恋

偉くなることを怖れる礫あり

死して生きむすべなきか児よ

死の床にあれば和らげるかなや児よ

恥多きこと思い出る日

死に近く片づけがたし咎はあり

水子のいのち恐山まで

時には丸坊主になって

一人になって屈辱を味わう

汚れちまった悲しみは

汚れた女の下着への愛着

形を残さない水子の影

時には丸坊主になって

一人になって後悔を味わう

読者のいない詩のことば

生きたいばかりに死のことばかり

詩らしきものを求めては

日々詩人から遠ざかる

連れ立ちて

黄昏の時を惜しめ

夭折した啄木のように

一人を抜け出した晩年がある

嵐のなかで身をよじり

柔らかな二人の庭の白樺が

ぶっかけそうだよと

妻の意外なひとりごと